

る「移動」の価値観の再検討である。つまり、巡礼という行為の本質を探究するにあたって、普段から「移動」を生業とする非定住民（たとえば遊牧民）などの存在も考慮に入れる必要があるように思うのである。

今回の内田講演では、前年の渡邊提言を受けつつ、巡礼者が共同体から離脱して、①死を選ぶ、②もとの共同体に戻る、③新たな生業につく、という三つの可能性があることが示された。たしかに、巡礼者と所属共同体との関係は、巡礼という行為を理解する上できわめて重要な視点である。しかし、相対的に定着度の低い大陸の人々にとって、ましてや厳しい自然環境の中で「移動」することを苦にしない人々にとって、巡礼という行為はやや異なった位相を帯びているのではなからうか。例えば、五体投地をしながら高山カン・リンポチェの周囲を延々とまわり続けるチベット遊牧民にとっての巡礼を、江戸時代の定着的社会に生きた人々にとっての遍路と比較した場合、どのような相違点が浮かび上がってくるのだろうか。遍路・巡礼研究を進めていく上で、巡礼者の共同体意識や「移動」価値観の多様性をめぐりこうした問題を意識しておくことも必要であると思う。

さらに、人々の「移動」とそれを常態化する都市ネットワークの形成によって発展を遂げたイスラーム世界にも目を向けておきたい。都市的宗教・文化としての性格を色濃く持つイスラームの世界において、ズールヒッジヤ（巡礼月）に各地から膨大な数の巡礼者たちが押し寄せる巡礼都市メッカは、多様なヒトやモノの環流する都市ネットワークの心臓部ともいえる存在である。したがって、メッカ巡礼の持つ経済的側面には注目すべき点が少なくない。例えば、巡礼者市場の形成やディヤーフアと呼ばれる貧しい巡礼者へのもてなしの慣行など、他の遍路・巡礼と比較して考察すべき要素が多くみられるのである。今回の内田講演で、「働きたい」というお遍路の申し出を認めた「抱え宗門」に関する事例が紹介されたように、あらゆる遍路・巡礼研究にとって、ヒトやモノの「移動」と、それに伴ってあらわれる経済的側面の考察は不可欠な位置を占めているものといえよう。

以上、今回のシンポジウムの講演・報告をふまえつつ、今後の遍路・巡礼研究の可能性・方向性の一端を示してみた。とくに、「大陸と日本列島との双方向的なつながり」は遍路・巡礼研究のいっそうの深まりに、「多様な東洋への視野の拡大」は研究の幅の広がり、それぞれ寄与するものと考えられる。

コメント 西洋史

関 哲 行

総合討論は四国巡礼に関する報告と質疑応答を中心に、多種多様なテーマにわたり、筆者の乏しい能力をもってしては、これらを咀嚼することは至難の業である。従ってここでは、筆者に関係の深いサンティアゴ巡礼などの地中海世界の巡礼との比較を念頭に、若干の所感を述べ、全体討論のコメンテーターとしての責めを塞ぎたい。

まず指摘したいのは、四国巡礼とカトリックの巡礼との親近性である。霊的救済と病氣治癒などの現世利益を希求する巡礼者、巡礼者の社会的結合としての巡礼講、巡礼者への慈善活動（お接待）、移動手段としての徒歩の重要性などがそれであり、他界観（観音浄土、西方浄土）についても「地の果て」の聖地サンティアゴとの共通点が顕著であった。イスラム教やユダヤ教の巡礼では、移動手段としての徒歩の重要性が減退するとはいえ、これらの親近性は他の様々な宗教圏の巡礼行にあっても確認される可能性が大きい。巡礼行が巡礼者の生地（共同体）と聖地を結ぶ、聖俗両要素を内包した儀礼運動、儀礼を介した既成社会（日常生活圏）からの一時的離脱行為であることを考えれば、宗教圏の相違に関わりなく、こうした共通の要素が検出されるのは当然であろう。巡礼歌や演劇（浄瑠璃）を通じた情報伝達、奇跡譚、聖地のコスモロジーやシンボリズム、終末論（末法思想）との関連、観光行動にも類似性が強く、歴史学、文化人類学、文学、宗

教史、地理学など多様な学問領域を動員した総合研究の必要性を痛感したのは、筆者だけではあるまい。

同様の親近性は、聖地の重層構造についても指摘できる。四国霊場は多様な宗教、宗派と本尊を奉じているといわれ、男根、女陰信仰などの山岳信仰や自然崇拜に加え、松山市内の霊場には隠れキリシタンの墓すら現存する。聖地サンティアゴも異教や異端の聖地との連続性をもち、イェルサレム南部のユダヤ教の聖地ヘブロンには、ユダヤ教徒のみならず、キリスト教徒（カトリック）、ムスリム（イスラム教徒）も巡礼ないし参詣した。聖地ヘブロンは旧約聖書の族長アブラハムの墓所とされ、旧約聖書を介した共通の歴史認識が、三つの一神教徒を繋ぐのである。異教や異端の聖地との連続性、換言すれば民衆信仰の包摂は、聖地としての主要な構成要件の一つであり、だからこそカトリック教会はそれを宗教儀礼として取り込み、統制しようとした。巡礼が儀礼化された移動とされる所以である。四国巡礼にみられる男根と女陰信仰は、サンティアゴ巡礼者の巡礼杖と帆立貝に対応しており、文化人類学や象徴人類学のいう再生と豊穡、始原の人類アンドロギュノスのシンボルであった。先史時代にも遡るとされるこうした民衆信仰が、四国巡礼でもサンティアゴ巡礼でも保持されたことは、聖地とは何かを考える上で刺激的である。

その一方で相違点も散見される。四国霊場ではカトリックにみられるような、聖人の遺骸に代表される聖遺物は確認されない。とすれば四国巡礼者の物的靈的救済は、何によって担保されたのか。「苦難の長旅」にして祈りの旅である八十八霊場巡りを完遂し、人格的変容を遂げることによってであろうか。サンティアゴ巡礼にあって、巡礼者の救済を保障するのは、「苦難の長旅」による内面的回心と聖人（聖遺物）の執り成しによる神の恩寵である。サンティアゴ巡礼との決定的相違は、聖人の遺骸という「聖化されたモノ」が介在することなしに、物的靈的救済が担保される点である。V. ターナーによれば民衆信仰の最大の基盤は、奇跡による病気治癒などの「信仰の外化」であり、それを演出する主要装置が聖遺物とりわけ聖人の遺骸であった。

多くの民衆が参加した四国巡礼において、「信仰の外化」を演出する主要装置となったのは何か。

この問題は聖地観の相違にも帰着する。カトリック教会では、聖人の遺骸などの聖遺物と無縁な主要聖地は考えられない。厳格な一神教とされるイスラム教やユダヤ教も、ムハンマドとアブラハムの墓廟のあるメディナ、ヘブロンを主要聖地として含んでおり、遺骸との関係は緊密である。聖人の遺骸の宗教的位層の相違は、比較巡礼研究の課題の一つであろう。

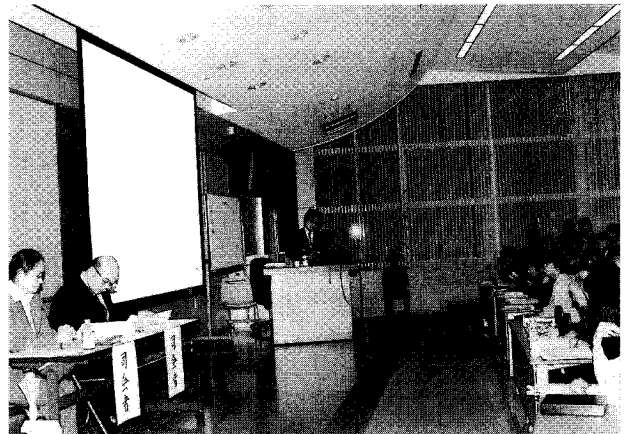
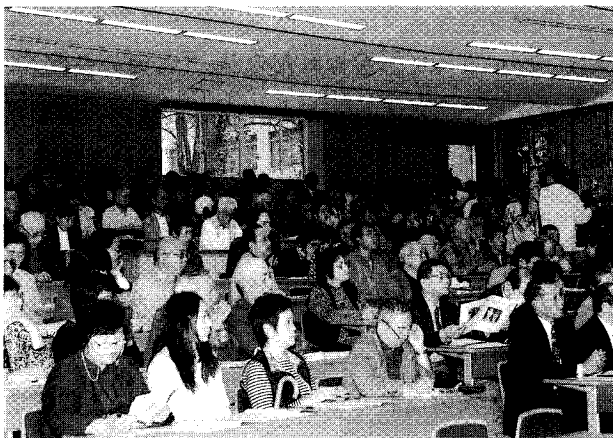
巡礼行と密接な関係をもつ慈善活動においても、相違がみられる。サンティアゴ巡礼では、教会・修道院、兄弟団に加え、王権が施療院を運営し、「神の貧民」としての巡礼者への慈善活動を展開した。四国の領主権力は、巡礼者への慈善活動に関与したのであろうか。

領主権力が関与していないとすれば、それはなぜなのか。一般にカトリック世界では、慈善活動は「富の社会的還元」を意味し、権力はそれに支えられてこそ正当化され、持続すると考える。慈善主体の相違は、権力の質にも関わる問題である。サンティアゴ巡礼の事例からみて、四国巡礼の慈善（お接待）研究は、慈善主体の言説に重きを置くあまり、慈善主体と客体（巡礼者）の関係が希薄化し、理想化されすぎているとの印象を受ける。カトリック世界では慈善活動の第一義的目的は、巡礼者の救済にあったのではなく、慈善活動による慈善主体の物的靈的救済にあった。こうしたカトリック的心性が、四国巡礼にどの程度妥当するかは今後の検証を待たねばならないが、宗教圏の如何を問わず、無私の慈善活動は考えにくい。慈善活動が慈善主体の物的靈的救済に寄与するとの前提があればこそ、多くの民衆が慈善活動を長期にわたって持続させ、それ支えられて巡礼も拡大したとみるべきであろう。

ハンセン病（ライ病）患者も、興味深いテーマである。サンティアゴ巡礼路都市では、ハンセン病患者のための特殊な施療院が設けられ、そこで宿泊・食事サービスが提供された。四国巡礼者の中にもハンセン病患者がいたとすれば、彼らへの慈善活動はどこで、どのように実施されたのか。あるいはそもそも四国巡礼にあっては、ハンセン病患者は差別されず、他の巡礼者と同様に通常の善根宿に投宿したのであろうか。中

近世スペイン社会において、ハンセン病は宗教と関わりのある業病とされただけに、検討すべきテーマである。

最後に巡礼者の階層構成に言及しておきたい。四国巡礼では武士の参加が、ほとんど確認されないといわれる。サンティアゴ巡礼では貴族、騎士の参加は恒常的な現象であり、国王すら戦勝祈願を目的にサンティアゴ教会に巡礼している。武士の不参加は四国巡礼特有の問題なのであろうか、それとも身分制社会の支配原理に関わる問題なのであろうか。白馬にまたがって天から舞い降り、イスラム教徒を殲滅する聖ヤコブと弘法大師の奇跡譚の差が、影響しているのであろうか。これらの相違を検討するためにも、前述したように文化人類学や象徴人類学を含めた多様な研究領域を糾合し、また複数の宗教圏に視野を広げて、様々な角度から巡礼現象を比較考察する必要がある。



公開講演会会場（共通教育大講義室）